2022 年度後期　大学院授業改善のためのアンケート

＜専攻代表からのコメント＞

■言語科学専攻代表　　土肥　伊都子

言語科学専攻は、院生が一人だけで、履修した授業も２つのみであった。授業アンケートの結果をもとに自己点検・評価はされていなかったが、そもそもアンケート結果をもとに検討すること自体がこうした授業形態に対しては不向きなものであるので、アンケート結果に立ち入らないことは構わないであろう。

「言語科学研究演習VI」については、学生の興味を、いかに英語教育に関連付け、さらにそれをどう今後の教育に活かしていけばよいか、という観点から指導されていることがわかった。個人指導の形での授業運営については、特に問題になることはなかったようであった。

「文法と意味」は、英文法と英語学の基礎的な考え方と概念を題材とした授業をされたが、院生からの質問もあり、双方向の授業運営ができたようであった。

■英語学専攻代表　Philip Spaelti

The evaluations returned show high scores which seems to indicate that students are generally satisfied with the quality of the classes offered. A small program like ours should allow teachers to attend well to students needs. This is reflected in the scores of questions (5), (6), (8) and (9). A slight worry however is the lower score on other questions, in particular (10), which shows that there is still room for improvement.

As for the English Major, since we have only few students, it's unclear how much credit for these results can be given to the English major. However, one advantage of this situation is that we can get more direct feedback from students.

The self-evaluations by the faculty also show their attentiveness to student's needs. Surely something we expect to continue, even though one of the faculty will be leaving the program at the end of this year.

■国語国文学専攻代表　　田附　敏尚

各担当の自己点検評価票を確認したが、総じて良い評価が並んでいた。これは、履修生への授業アンケート結果ともおおむね合致するものだろう。

特に、図書館で貴重書などを実際に見せる、グループワークを行い、ディスカッションをするなど、前期から引き続きアクティブラーニングへの志向が高まっているようである。また、PC を用いてデータの収集・分析をするなど、ICT 教育を見据えた内容もあり、各担当が工夫を凝らしている様子が見て取れた。さらに、これは学部の授業と異なり、大学院の授

業として特徴的な点であるが、授業内での研究内容を外部の研究会で発表するといった高度な研究活動に踏み込んだものもあり、充実した教育活動が行われていたことがうかがえる。

基本的には現状でうまくいっているようなので、これを維持し、さらによりよい教育を目指すように心がけていきたい。

一教員として述べるならば、この状況は、今の履修生が積極的に授業に臨んでくれている点も大きいと思う。その相乗効果として、授業運営もスムーズに行われるのであろう。今後、どのような大学院生が履修生となっても、同じように良い授業が展開できるよう、我々は努力していかなければならない。

■心理学専攻代表　小松　貴弘

アンケート結果に関しては、ほとんどの項目で多数の回答者が肯定的な評価を寄せている一方で、一貫して否定的な評価の回答者が 1 名いること、それに加えて質問 7「授業時の発表のための準備期間は十分に与えられた」、質問 11「授業内容に関する質問や要望に、すみやかに応じてもらえた」の 2 項目については、比較的否定的な評価の回答者が 1 名ずつあることが気がかりである。回答者の属性は明らかではないが、このような評価があることは重く受け止める必要があるだろう。改めて、授業担当者がそれぞれに受講生との丁寧なコミュニケーションに努めることの重要性を確認したい。

各授業担当者の自己点検・評価票からは、授業の内容と進め方について、多くの授業担当者が受講生とのコミュニケーションに努めていることがうかがわれる。とりわけ、心理学専攻の一年次生は、後期から学外での実習がスタートすることもあり、心身の負荷の増大を感じ、調子を崩す者も散見されるようであり、この点に関して配慮するコメントが見られた。また、実習と授業内容との関連についてのコメントが複数あり、それぞれの科目で学ぶ内容が実習を進めるうえで実践的に役立つように、工夫を凝らしている授業担当者が多いことがうかがわれる。

他方で、受講生の受講態度に戸惑いを覚える旨のコメントもあり、大学院で学ぶことの意義やそのために求められる受講態度について、専攻としてより丁寧なコミュニケーションを大学院生との間に育んでいく必要性があるかもしれない。

＜総括＞

■文学研究科長　　土肥　伊都子

大学院の授業アンケートは、昨年度より方式を変更し、回答者の匿名性を保証するために文学研究科のどの専攻の院生からの回答かが分からない形で結果を出すことにしている。そのため教員も専攻代表も、授業アンケート結果が当該専攻の院生のものであるかどうかは明らかでない。こうした事情を踏まえて、各専攻代表からのコメントをまとめ、研究科全体としての評価をしたい。

まず、ほとんどの項目で多数の授業アンケート回答者が肯定的な評価を寄せていた。これについては、国語国文学専攻代表では、アクティブラーニングを志向した授業や ICT 教育を見据えた授業を高く自己評価しており、心理学専攻代表では、授業の内容と進め方について、多くの授業担当者が受講生とのコミュニケーションに努めていたとの高評価をしていた。英語学専攻代表も、返却された評価は高得点で、院生が授業の質におおむね満足していることを示しているという評価をしていた。

しかしその一方で、一貫して否定的な評価の授業アンケート回答者が 1 名いた。注目すべきは、これについての見方が、専攻間でかなり異なっていることであった。これについては、かなり強固に否定的評価をした者が一人でもいた以上、全専攻の教員が、もっと目を向けるべきではないかと感じた。今後はこれまで以上に、全専攻の教員が院生との意思疎通に留意し励むよう期待する。